

自然に、焦らず

松橋 達也

「障害を持った人は街中で暮らすより、広くてのびのびとした施設で生活した方が幸せでしょう。何故せうか施設で生活しているのに住宅地になんか。よりによって私の家の隣になんて……」
現在、地域で生活する準備を進めている4名の女性。彼女たちが生活するグループホームを立ち上げるため、先日市内のA地区を訪れた時、かけられた言葉である。市内でも福祉に対する意識が高く、コミュニティ運動も盛んと言われている地域だ。

「これからは、市原市内にいくつものグループホームを立ち上げてきた。いずれの地域でも非常に好意的で、自然なお付き合いをさせていただいている。理解が進んできたことと実感していただけに、非常にシロキングな言葉であった。」
これが現実なのか……

「だけれども、ありのままに、その人らしく地域で暮らす」という新たな地域福祉の具現化に向け、千葉県では官民協働で様々な研究会を立ち上げている。その中のひとつ「障害者入所施設等のあり方研究会」に委員として参加した。この研究会は、官民協働の「施設整備推進」のような入所施設そのものを否定する立場にも、障害者にとって入所施設で生活することが一番幸せという立場にも立たず、「障害者がその人らしく地域で暮らせるようにするために、入所施設はどのような役割を果たせるか」という観点から議論することが目的であった。特筆すべきは、入所施設を否定せず、時代に即した新しい入所施設像を追求しようという前向きな姿勢を持って研究会が設置されたことにある。

の開発を進め、可能であれば入所施設をなくしたい。④入所施設で暮らしている方々の生活の質こそが問題。まずはこの問題をクリアすべき。⑤24時間365日体制という入所施設ならではの機能を最大限発揮することにより、地域福祉の拠点として存在すべき。いずれの意見もなるほどその通りと思わされるが、いざ集約する段階に至るとすれ違ひ議論。時には激論も交わされたが、最終的にはそれぞれの主張が上手にまとめられ、現時点ではベターと思われる報告書が出来上がっている。具体的な内容をこの場で簡単に述べられれば良いのだが、私の頭ではきちんとまとめられない。まだご覧になっていない方は是非県のホームページなどから入手して、直接お読み頂きたい。冒頭に戻る。

一方的にお話を伺った後、顔を引きたらせつとも指一杯の笑顔で対応。しかし……説明すればするほど感じる深い悔い。やや興奮気味に、彼女は施設が社会とかけ離れた存在であった時期が長かったために「障害者は施設で暮らすもの」という概念が染みついてしまったのだろうか。このような考えをお持ちの方がまだたくさんいるのだろうか。彼女の後ろ姿が玄関に吸い込まれるのを確認し、独り考えた。

社会にはいろいろな人がいる。その全ての方に皆同じような理解を示して頂けないことは承知している。しかし、一人でも多くの方に「誰かが、ありのままに、その人らしく」生活出来る社会を作っていくこととする気持ちを持って頂けないのか。そのために施設として、施設職員として、社会の一員として何が出来るか、何をすべきか。

いろいろな思いが交錯し、しばらくの間、気持ちの整理がつかなかった。しかし、そこは生来の楽天主。出てきた答えは、「きっと彼女も解ってくるはず。いや、解ってもらおう、時間がかかっても。」



だった。そう、特別なことは必要ない。自然に、焦らず、今まで通りやっていく。住宅地から施設に向かい、車のハンドルを握るうちに、私の胸から溜りと盛しさは消えていた。

(生活支援ワーカー)

「柔道部物語」

佐藤 礼奈

十一月十九日今日は「柔道部杯全日本柔道体別選手権大会」千葉ポートアリーナの会場である。懐かしい緊張感のある空気(理事長は良いというが……)選手を見守る立場になったのは今回で何度目だろう。

この大会は体別別の全国大会で上位三位以内に入賞した選手だけが出場の特典を手に入れたことができた。私の後輩坂東は八月に行われた「全日本実業柔道個人選手権大会」で見事三位という結果を残し、今日私達をポートアリーナに連れて来てくれた。

今回観戦に来たのは、理事長をはじめ利用者の方達二十名と職員二十名、総勢四十名の応援体制。人数だけでは有名な業に負けていない。皆柔道を観戦するのは初めてだが、最近の柔道は観る人に分かり易くルールも変わってきており、初めて観戦する人でもポイントを取った際に分かり易く、また実際に目の前で観戦することになれば、ものすごい迫力を実感することが出来る。その上、戦場の仲間が出場すると出来れば大興奮である。

私の後輩、坂東との出会いはちょうど一年前。大学時代の友人の結婚式に呼ばれた際久しぶりに再会した恩師から「福祉の仕事をした」という学生がいたので、是非面会を見て欲しい」と話があったことが始まりである。すぐに本人と会う約束をして、現場の状況を説明することになった。私と同様、体育大学を卒業し柔道一筋でやってきた後輩は、福祉に対して全く無知の状態である。裏表隠さずありのままを伝え、実際にある里学舎を見学した彼女は、初めて社会人になる不安よりも、前向きで真の明るさが溢み出した表情で、期待と意欲に溢れていた。

採用試験後、理事長に呼ばれ、「坂東さんはまだまだ柔道に対する熱意が冷めていないのか。このまま就職するより本人が希望するのであれば、柔道を続けさせてあげたい。未練が残ったまま仕事を断るより、やるだけやって思い残すことがない状態になってから仕事を断る方が、本人にとって良いのではないか」というお話を頂いた。

素晴らしいお話だが、どう考えても全く先が見えない……自分が身を持って柔道というものを体験してきたがゆえ、その大変さはよく理解している。本当に仕事の傍ら柔道を続けていくのだろうか……

道一筋でやってきた後輩は、福祉に対して全く無知の状態である。裏表隠さずありのままを伝え、実際にある里学舎を見学した彼女は、初めて社会人になる不安よりも、前向きで真の明るさが溢み出した表情で、期待と意欲に溢れていた。

採用試験後、理事長に呼ばれ、「坂東さんはまだまだ柔道に対する熱意が冷めていないのか。このまま就職するより本人が希望するのであれば、柔道を続けさせてあげたい。未練が残ったまま仕事を断るより、やるだけやって思い残すことがない状態になってから仕事を断る方が、本人にとって良いのではないか」というお話を頂いた。

素晴らしいお話だが、どう考えても全く先が見えない……自分が身を持って柔道というものを体験してきたがゆえ、その大変さはよく理解している。本当に仕事の傍ら柔道を続けていくのだろうか……

日が続いてくれたのだ。そして私は今日、試合会場にいる。

戦場の仲間は自分でも誇れるくらいに雰囲気が良い。猫の手も借りたい程忙しい毎日の中、三時に仕事を切り上げて大学まで練習に行く坂東を、快く送り出してくれる。試合の前には必ず声を掛けてくれる。本人もそのような状況をよく理解した上で、いつも謙虚な心構えを忘れず、慣れない仕事と慣れない運転(勝浦にある国際武道大学までの片道一時間の運転)、学生時代とは気持ちの上で重さが違う日々の練習、よく耐えてきた。

前年八月の「全日本実業柔道個人選手権大会」は、それぞれ学生生活を終え、社会人となった柔道選手が、自分の始める職場の名前を背負って戦う全国大会である。就職してから柔道を続けていくには、それなりの実績や柔道に対する熱意が必要であり、学生時代から名の知れた強豪選手が多数出場していた。

今日の大会はその中から更に勝ち抜いて来た一流選手ばかりである。素人でも知っているであろうオリンピックメダリストや、先日の世界選手権出場者が多

く出場しており、社会も住友海上やコマツ等、聞いただけで一瞬引いてしまうような強豪選手たち。そんな中、「ふる里学舎」という福祉関係の所属はもろに坂東だけである。

試合が始まった。金く引けを取らない風格で強気。かつこい……

開始二分で袖鉤り込み腰で効果ポイントを取った。直後、気が緩んだのか外陣で相手に払い腰を掛けられ技ありを取られる。その後三分間攻め続けるが逃げ切れず、今回は悔しくも初戦敗退、残念な結果ではあったが、皆に与えてくれたものは大きい。その日の夜は帰って慰労会。坂東の人徳から三十名以上の職員が集まってくれた。

そこでの理事長からのお話。「福祉と柔道」全く別の世界のようだが、皆の心をひとつにして感動を与えてくれたことが重要なことであると。

彼女は私にバットを与えてくれる。柔道から離れて七年……気軽に趣味で続けられる競技ではないので、日々の生活の中で忘れつつあった熱くなる気持ち、力強さや集中力、謙虚さ、前向きな姿勢、柔道で培ってきたものを思い出さず。そして何より人との繋がりの大切さを実感した。このような環境に自分がいられることを感謝して、坂東のように初心を忘れず謙虚な気持ちを持って仕事に励みたい。



(支援員)

編集後記

事務局から引越後、早八ヶ月。新しい環境にもようやく慣れてきました。自然豊かなこの和洋館。無類し馬具民にとって、毎日海を見ながら通勤出来るなんてとても幸せな事です。そんな和洋館から佐藤50号を送ります。

(佐藤)